

大会後記

NEURO2019 を終えて

NEURO2019 大会長 那波 宏之, 実行委員長 武井 延之
新潟大学脳研究所

去る7月25日から28日、新潟市の朱鷺メッセにおいて第62回日本神経化学会(大会長:那波宏之)をNEURO2019として開催し、無事終了することができました。NEURO2019は第42回日本神経科学大会(大会長:岡本仁)との合同大会でNEUROを冠する大会としては2013年以来6年振りの開催となりました。合同大会ということもあり、プレナリー講演4題、特別講演4題、受賞講演等10題、教育講演17題、シンポジウム61企画/284演題、56一般口演セッション/223演題、若手道場52演題、ポスター発表演題1,158題と合計1,752演題もの発表がありました。また、当日参加も含め、3,146名の参加者がありました。内、学部学生が127名にも上り、若手育成の点からも喜ばしいことでした。神経化学会の独自企画としては、理事会企画シンポジウム、ISN-JSN joint Symposium、優秀賞受賞者企画シンポジウム、若手育成セミナー出身者企画セミナー、若手道場、優秀賞、奨励賞受賞者講演、多分野交流セミナーなどを行いました。このような盛況な大会となり、ご発表頂いた皆様をはじめ、ご参加下さった方々、ご支援、ご協力を賜りました全ての方々に厚く御礼申し上げます。

合同大会でのメリットはやはりサイズ効果が一番大きいと思います。多くの発表を一度の機会で見聞きすることができ、普段あまり馴染みの無い分野にも触れる事ができます。また神経科学学会側が国際化を意識していることもあり、多くの海外からの参加者があり、英語でのディスカッションなども良い機会であったと思います。

企画運営に関しては、神経科学学会の大会はすでにフォーマットがかなり決まっていて、独自企画は難しい印象でした。また専属スタッフ数人を

擁す事務局もあり(大会前の会合も多くは事務局で行いました)、会員数でも5倍ほどと主導権は握られているアウェーでの企画となってしまいました。この点は今後の合同大会でも覚悟が必要でしょう。とはいえ上記のような独自企画も行うこともできましたので、最低限の独自性は出せたかと思っています。反面、事務処理や展示、ランチョンなどの企業協賛の獲得に関しては、苦労が少なかったです。また新潟県、新潟市からの助成金は大会の規模に合わせて最大枠の1,000万円ほど出る予定(まだ確定していません。財政状況の悪い県、市に暮らす住民としては複雑ですが、全額出ないと赤字です)、大会運営上非常に助かりました。

大会場は動線にやや不安がありましたが、大きな混乱もなく進行しました。どの会場も朝から良く埋まっていました。地方都市はホテルと会場が近接しているのがメリットかも知れません。特記すべきは若手道場の盛況振りで、小さめの会場とはいえ、立ち見ができるほどで、過去の大会に比べても活気がありました。また多分野交流セミナーも例年参加者が少なく講師の先生に申し訳ないこともあるのですが、今年は特に多くの人に参加して頂きました。これらの独自企画が単独開催でも引き続き発展して行く事を願っています。若手育成セミナーに関しては、参加資格が神経化学会会員限定、ということもあって大会とは別枠での開催となってしまいました。この点も次のNEUROでの検討課題となりそうです。

全ての関係者の皆様に改めてお礼を申し上げると共に、神経化学会のさらなる発展を祈念して大会報告とさせていただきます。

有難うございました。